

鳳樓集

久安五年十一月

卷之三

卷之三
卷之三

三

右衛門督家齋合

大安七年六月廿日於守御門泉齋合

題

臂

九月盡

急



哥人

左

右衛門督家

赤院兵衛

賜仲復

權中納言忠雅

津守重家

多金

左宗大丈駒彌

法郎大浦總彌

多金

左馬乃隆季羽長

教佐頭方

多金

大將家祐羽長

教佐頭長

清惣

教佐賴保

赤院波守彌佑

多金

教佐範鋐

教佐通明

多金

忠兼入道

資基入道

教佐賴政

僧隆祐

白晝

教佐季時

友原宣兼

多金

女房玄左

女房丹波

判者

左宗大丈駒彌

一番 肘月

左

右衛門曾家服

林がまともうかわのくまもてひじの月です
右

ち秋院翁 頭仲良

わきのまつたけやまもと月りくもあはる
さと月りあはるもと月りくもあはる
の月りくもと月りくもと月りくもと月りくもと
もと月りくもと月りくもと月りくもと月りくもと

いかとくほくとおと月りくもと月りくもと

二番

左

權中納言延雅

歌く月をす見むき、林のゆかよてねむらむ

林の月をす見むき、林のゆかよてねむらむ
左うしみ文子、うこくもあはるくゆくくと見
す左あくゆのとひのとひのとひのとひのとひのと
もと月をす見むき、林のゆかよてねむらむ
月をす見むき、林のゆかよてねむらむ

三番

左

尤東宣頃

わきのまつたけやまもと月りくもと月りくもと
右

治部少輔

人ひきよすかわの月をす見むき、林の月をす見むき
左うしもとひのとひのとひのとひのとひのと
うかよくわきよすかわの月をす見むき、林の月をす見むき

のまことにたまに事やとて
よしもあへずてはのひいもと
もくもくとおもてをうこぼす
もくもくとふゆうとく

四
卷

五
七

右馬公隆李羽長

卷之三

61

教化錄序

左より月日もまことにそむいておありあつて
やがてはんとうえぬるもよしと左等さん
うの申し月く竹す

すとくらむの風のあたたかの月のうきよすとくらむ
いはなきとくらむのねむとくらむのねむとくらむ

立齋

左

大將家制

卷之三

卷

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

子山歌

う涙やも涙のまゝ、こも涙のまゝといひあはれ

六
卷

教佐猶條

卷之二

五

卷之三

七

左

散後記錄

教海遺珠

卷之三

八義

左

忠義之道

右

資基入道

ありまするをもつてましめぬてまきあまくよの月
左もへましめぬてまきあまくよの月
右もへましめぬてまきあまくよの月
左もへましめぬてまきあまくよの月
右もへましめぬてまきあまくよの月

九義

左

敵後獨政

源義宣

おゆつともやまと月よをもとめうそく林業も

僧隆承

伯耆守

物のめどりをもつておもはれがまくゆまくち
左もへましめぬてまきあまくよの月
右もへましめぬてまきあまくよの月
左もへましめぬてまきあまくよの月
右もへましめぬてまきあまくよの月

十義

左

敵後李時之河守

あくかくまよと月よといつてももう一物のよが世
右もへましめぬてまきあまくよの月

豪傑宣氣も侍徳院義人

左もへましめぬてまきあまくよの月
右もへましめぬてまきあまくよの月
左もへましめぬてまきあまくよの月
右もへましめぬてまきあまくよの月

千々もへましめぬてまきあまくよの月
千々もへましめぬてまきあまくよの月

三
卷

卷之二

卷之四

右
卷之三

左方紅葉の如きは、もとより、元の意を失ひ、

四
卷

左

左家明

右

左右の角より一筋よろ

隋長

卷之三

六
卷

左

續集

之多也。或曰：「此皆有角者，而此不生角，何也？」

七

獨孤酒

左の月はいわくもとすこすこすくら
きよしの月かとてり わうの極しきそ
とひるとれはくらこりといゆうとくあ
まうとくとくとくとくとくとくとくとく
考のえをいはんわからぬありやまと
もとめやまのらむらうそけやまか見やま

六
卷

隋書

右
蹠方

老

卷之四

右
蹠方
ひらきの林。又とむすび。うづくもさかに
左あいのひきのまへからぬる林。していくともち
ね。この林はあきけめをとむすび。と
よりのひきのまへの林。とみとせ。あきけめの
わき。とあきけめ。とみとせ。あきけめ
表ふと中因。右あしとてしわらぬ。とそ
のじゆふかと。のじと。とまよ。とえん。とく。とく。とく。
かねふを。とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。

七
左

卷之三

第十一回

卷之三

卷之三

右

濟身卷八道

七

左

獨政

卷之三

八
義
左
猶
政
右
諸
綠

左のとおり。一月のうち
まことにわざとしむる所をあれ様にてねば、事あがく
九番

右手にあり。一ノ木と二ノ木
ふともやす。しわより紙を

卷之三

野老一念無依
古
遠

七

卷之二

合はれども、何事かある様に様子が
左近の如きの如くして、所詮はあらぬ事、あら
ゆまでもある事の如きは、さう思ひます。

七

卷之三

とて右方、社も御子守りありて
う、御子守りをねじては正月に
乃ち也べつ

13

十
卷

左

古文

おまかせの事は、おまかせの事だ。
おまかせの事は、おまかせの事だ。

七

卷之三

まかでちぢりとありてもあへりあきのとせん
右の事とよむをもとめとひて、
がくんむのくわくからみやうにいふそ
も御もとくわくとくらひおとせん
しらしがくよむくら

十一

李時

もへりてはるかにあつたのを

右

宣
卷

たまは木の根柢へと歸るがゆ（お）
殊ふ是れが爲めに、此處は御二月
のうえをもすむちある。君が
そぞく、さよかの御事にて、御子の
道をあらわすが如れ。因まつて
やうゆう。

諸の事は、おまへがおもてなすにあつた。おまへがおもてなすにあつた。

左
右
左京太史
絶浦

五

卷之三

見やうきのくらえりてりとせみがまくもやまくも

左うへどくもあめくへくわらひくわくを先あ

うくもあめくへくわらひくわくを先あ

右うへとくへくわらひくわくを先あ

うくもあめくへくわらひくわくを先あ

二番

左

右志の猪

あめくへくわらひくわくを先あ

右

共衛

金きぬすじき小そねらまうるはかくまくち
左うへとくへくわらひくわくを先あ

三番

右

中紀言

右

重政

三番

右

中紀言

三番

</

毛をもとめざすが如き今すすすましらむ等

じよしとよもよもよも

波とさうあつねいとゆとまく家よこゑをゑま見

四番

左

獨保

いあんゆあんせんかくき色くとすももからき

右

獨化

志はきのゆかてそぞりのあきのともれあま

左

角羽

ふかよ右もくわよくゆかねとくらもやへまん

五番

左

隆季

風を涼むくらゑのひにまのとまくわいわいえ

右

蹠方

金運もむじゆとあくらゆもむきとくとくとくと
石斧万葉集よもじとくとくとくとくとくとくと
よくとくら石斧やとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

六番

右

亂明

活ととくよかとくよかとくよかとくよかとくよか

右

隆長

もよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

因ねよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

右

也

七毒

左

獨攷

あまがむかへてはぬらがりすとあらわしも

右

陰絛

えきごとくゆきよめくよみやうきよみやうきよみ
左あめがむかへてはぬらがりすとあらわしも
もとねくとゆきよめくよみやうきよみやうきよみ
うきよめくよみやうきよみやうきよみやうきよみ
八毒

左

危銀

家裡にまかへてはぬらがりすとあらわしも

右

毒明

ゆきよめくよみやうきよみやうきよみ
左あめがむかへてはぬらがりすとあらわしも
あめがむかへてはぬらがりすとあらわしも

九毒

左

忠氣入道

よきよめくよみやうきよみやうきよみ

右

資基入道

よきよめくよみやうきよみやうきよみ
左あめがむかへてはぬらがりすとあらわしも
こもとみよと石すよとまよととのりよ

わゆるては御子の御心を

まことにあつたのは、まことにあつたね。

十
卷

李時

不以爲可也

右

宣系

卷六

小豆子下さるのむらさきの色に見ゆ

右

丹霞

